「抱樸館福岡を地域づくりの拠点にしたい」

グリーンコープのホームレス支援の拠点として、誰もが１日も早い開所を望んだ抱樸館福岡。５月１日、開所式を終えていよいよ活動がスタートします。

ホームレス者の自立をサポートするスタッフは総勢１８人。中でもマンツーマンで寄り添う相談員は、館長の青木康二さんをはじめとする９人。準備段階から関わってきた瀬﨑篤弘さん、久保和雄さん、市丸さやかさんの３人に抱樸館福岡にかける思いを聞きました。

ホームレス問題を考える 14

竣工間近の抱樸館福岡のようす

ホームレス者が路上生活から自立するのを支援し、さらにその自立が継続するようサポートするのが相談員の仕事だ。具体的には巡回相談・生活相談・アフターケアの三つで、マンツーマンの担当制とする。家族・親類、友人とのつながりが切れているホームレス者が、人との絆をもう一度回復して立ち上がれるよう、相談員はまずその人が信頼する最初のひとりに名乗りをあげる。だから「担当する」とは生やさしいことではない。一生付きあう覚悟で臨む。

３人の相談員の中で一番若い23歳の久保和雄さん。２００９年、大学を卒業して求職中に、支援機構に携わっている知りあいの牧師から職員募集の話を聞いた。学部は福祉系ではないが、福祉に関心があり応募した。

高校生の頃、その牧師から北九州市で「炊き出し」があるから来ないかと声をかけられ、参加したことがある。当時の北九州は支援体制も十分ではなく、もっとホームレス者は多かった。日本にこんな人たちがいるんだと驚いた記憶がある。

久保 和雄 さん

採用後に研修がはじまり、いざ生活相談の場に臨むと不安になった。こんなに若い自分の言うことを、辛酸をなめてきたホームレス者が受け入れてくれるのだろうかと。だが不安はすぐに消えた。年配の人から相談を受けたり、「君だけに言うけど…」と心の奥を明かしてくれる人もいた。今の自分のままでまっすぐ向きあえばいいのだと安堵した。研修期間中10人の相談にあたり、そのうちの３人は自立するためのアパート入居まで付きあった。「これからも必要とされる限り関わっていきたい。本当は自分たちの出番がなくなるのがいいのでしょうが…」。ゆっくりと言葉を一つひとつ押し出すような話しぶり。誠実さがにじみ出る。

市丸さやかさん、25歳。大学卒業後、大手通販のコールセンターに就職した。だが、駒のように働かされることに違和感をおぼえ退職。自分を生かすため小規模な商社に転職したもののそこもなじめなかった。

そのような時にＮＰＯ法人北九州ホームレス支援機構スタッフの先輩から声をかけられた。思ってもいなかった職種に少し迷ったが、「人生一度きり」と踏みきった。支援機構で昨年９～12月の３ヵ月間生活相談事業の研修を受け、今年から福岡市の巡回パトロール、炊き出し、自立者の病気見舞いなどに日々忙しい。

「巡回」などに関わりはじめた当初は、ホームレスの人たちがどういう精神状態にあるのかつかめなかった。何回も顔を合わせるうち、ひとりで路上に暮らす不安や寂しさが分かるようになり、同時に「この次も来てくれ」と心待ちにされるようになった。ホームレス者に限らず、人を真に理解するには時間がかかるのだと実感する。

市丸 さやか さん

最近20数年も路上で生活しているという人に巡回先で出会った。自分が生きてきた時間にほぼ匹敵する長さ。驚く一方で、その人にとって人生とは何なんだろうと考え込まざるを得なかった。今、目の前に展開されているのは紛れもなくリアルな人間の生。その重さにしっかり向きあおうと覚悟を決めている。

瀬﨑篤弘さん、34歳。大学・大学院を通して社会病理学をテーマとし、主に外国の貧困事例を研究していた。その研究のフィールドは主にイギリスなどの先進国だった。格差社会が生み出す貧困やドラッグなどの病理。やがて日本も、と思えた。ところがみるみる足下が揺らぎはじめた。「日本の社会状況の方が自分たちの研究を追い越しはじめた」と感じ慌てた。

縁あって２００８年11月支援機構に入職。館長の青木さんと共に一切を牽引する立場となった。

正式に採用となる少し前、北九州で最初のパトロールに出かけた時のことだ。青いビニールシートのテントの中に、歳をとり病気で弱りきっているホームレス者を見つけた。弁当を差し出すと「ありがとうございます」と押し頂いた。こうした現実があるとは…。その衝撃は今も言葉にできない。

最近、路上で衰弱しきった69歳の男性に出会った。サポートするうちすっかり元気に。自分を取り戻した彼はユーモアのセンスのあるおしゃれな人だと分かった。「出会えて本当によかった。医者ではないけれど生命を救っている」と思う。

今の日本は、昔では考えられない層の人たち―大学卒、有名企業という経歴の持ち主でも、リストラなどを契機にある日路上生活に陥る。若年層にも容赦はない。そうした現実を直視し、「できるところから、この状況を変えていきたい」と切実に願う。

抱樸館福岡を「ホーム」に帰っていく「ふるさと」に

これまで人の縁というと、地縁・血縁・職場の縁だった。

瀬﨑 篤弘 さん

だが１９９８年以降自殺者が年間３万人を下る年がなく、ホームレス者が急増するという現実は、そうした縁がもはや機能しなくなっているということを示している。相談員たちは新たな人間の繋がりを「抱樸館福岡」から創りあげたいと願っている。

市丸さんは巡回先の博多駅で、ホームレス者から「元ホームレス仲間がたずねてきてくれた」という話を聞いた。２人ともお金もないので、博多駅で出会い一緒に野宿して旧交を温めたという。「２人の再会が抱樸館でできたらいいなと思う。それから、寂しくて暇だからお酒を飲むというホームレス者もいた。そんな人は自立後、昼間は抱樸館に来て夜自宅に帰るのもいいのでは」。抱樸館をたくさんの出会いの場にしたいと思う。

久保さんも重ねて言う。「物理的な支援だけでなく、いつでも帰ってこられる場所、いつでも相談に行ける場所にしたい。めざすは明るい抱樸館福岡！僕は抱樸館福岡のある多の津を有名にしたいんです。ここにこんなに豊かに人を生き生きとさせるところがあるって」。

瀬﨑さんは「抱樸館は母校というイメージかな」と言う。ホームレス者は人との縁が切れている。まず抱樸館で人生を組み立てなおしてほしい。そして抱樸館を拠点として、地域にこれまでとは違う新しい人の繋がりをつくりたい。社会に「人と人との繋がりのあり方」をもう一度問い直していきたいと抱負を語る。

現場を統括する青木さん。「若い僕たちは相談員としてはまだまだ未熟です。でも、グリーンコープのみなさんと支援機構の20年の経験に支えられて、人間として対等な関係でホームレス者にずっと寄り添っていくということに合意しています。それさえあれば前へすすめると確信しています」。

「抱樸館福岡」発の地域づくりがゆっくりと出帆した。